

地域学習教材「坪田譲治の文学と岡山」

資料コンテンツ

ノートルダム清心女子大学
「文学と岡山」製作委員会

資料コンテンツ第2部

作品研究 ②

「随筆」

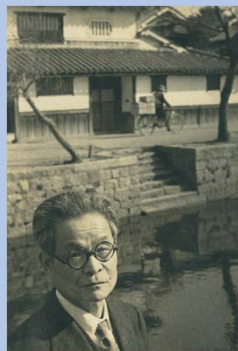
本番組は、岡山出身の児童文学者・坪田譲治から地域を学ぶ、地域学習教材「坪田譲治の文学と岡山」第2部の②「随筆」の資料コンテンツです。
作品に登場する岡山を中心に、譲治の岡山に対する思いを描き、坪田譲治文学の魅力を味わいます。



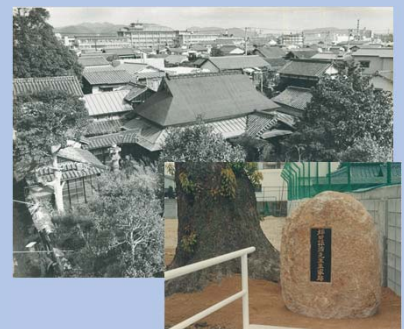
坪田譲治先生、故郷に行く

※出典:『田園まことに荒れんとす 岡山風土記』別冊小説新潮(昭和30年5月号)

自分で作家と名のるのも、遠慮のようでもあります。然(しか)し届けなどの職業というところには、いつも書くことです。で、先月二十四日から三日間(※注…1956(昭和30)年2月)ばかり、故郷である岡山を訪ねた、その紀行文をこれから書こうとするのであります。



着いたその日、直ぐ訪ねて行っただのが、私の生家であります。私の作品を読まれている人は知って居られると思います。「その村は蕨茸(わらぶき)の農家が二十ばかりで、どの家にも柿の木が曲りくねった枝を空にさし上げていて・・・」そんなことを、私は小説に随筆に書いているのです。



童話などには、善太だの、三平だのという子供が、田圃(たんぼ)の中の小溝を、手アミをもって、小鮒を追いかけて居ります。(中略)



私の生家は、昔のままと言いたいところですが、十年、人が住まなければ、こうもなるかという荒れ方です。人が住んでみないわけでもないのですが、今は、七十幾つかになる兄嫁が一人で、家を守っております。屋敷は三百坪ですが、家は何坪あるかわかりません。十四五の部屋に、二つの土蔵、その他ということです。(中略)



然しこの玄関には、幾分かの思い出もあり、また私として、文句もあるわけです。というのは、これを見ると、きつと、「これは田舎の政治家、村会議員が、県会議員の家だ。」と、読者が思われることです。昔、そうです。私の子供の頃、ここは土間を広く取った農家風の玄関だったのです。そこには、明治の前、酔っぱらいのサムライが来て、カタナをつきさしてあばれたという、大戸なんかも立っていたのです。それを、私の兄がこんな風に直し、私は家の風格を落されたようにフレンジイしております。(中略)



然し話は早くすめましょう。私たちは、私のウチを写すと直ぐ、後楽園へ車を走らせました。(中略)昔は、鶴が何羽も、そこそこを歩いていたのですが、それが今はスワンに変わり、それも一羽だけのスワンです。これも淋しい一つであります。



百間先生の生家は、この後楽園の裏門の近くにあります。今、それがあのか、ないのか、私は知りませんが、先生にも、なつかしい後楽園にちがひありません。これで、この一日は終了しました。



それでも、私は方々歩き廻り、やはり六十年近い昔、桜の花の盛りの頃、小学校の遠足に、ここへお弁当の巻ずしをもって来てそれを食べ食べ、一日中走り廻って遊んだことを思い出しました。その頃を思い出すと、本誌の読者にも親しい、百鬼園先生のご心が心に浮かびました。



次の日は、石井小学校です。これは私の行った小学校です。田圃の中にあつて、床下にイタチが巣をしていたといふ小学校だったのです。(中略) とにかく大きな学校になっていました。まわりだって、家でビッシリ、田圃は町になっているわけです。



玄関へ入って行くと、昔の友達がもうスツカリ歳をとって、迎えてくれました。(中略) 「よく来てくれたね。」
「そう挨拶しますと。」
「もうこの次に会えるか、どうか、わからんからね、今日はムリでもやつて来た。」
そう言うのを聞くと、少しセンチと思いましたが、やはり嬉しい気持はするのです。



小学校時代の友人二人と、イタチを捕らえた思い出話に花を咲かせた。

(案NHKラジオ・明るい本の間
「坪田康治の道35年」の録音テープより)



(中略) この図書室は、この学校の六十周年記念につくられたものだそうです。それで私も童話の本を少しばかり寄附しました。それは、ここに来て見ると、「坪田文庫」と名れが立てられ、別の本棚になっていました。少し恥ずかしい気がしましたが、その寄附には、幼い頃の思い出もあるわけです。

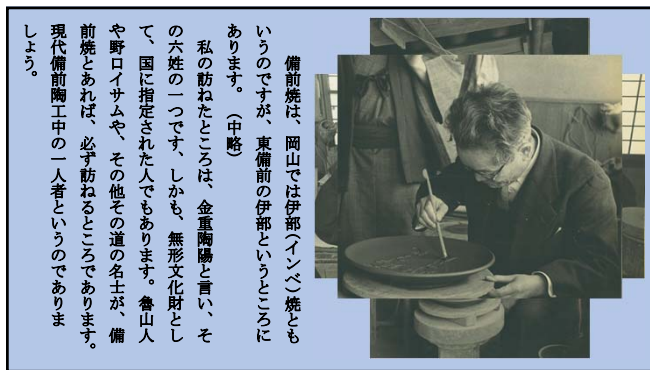
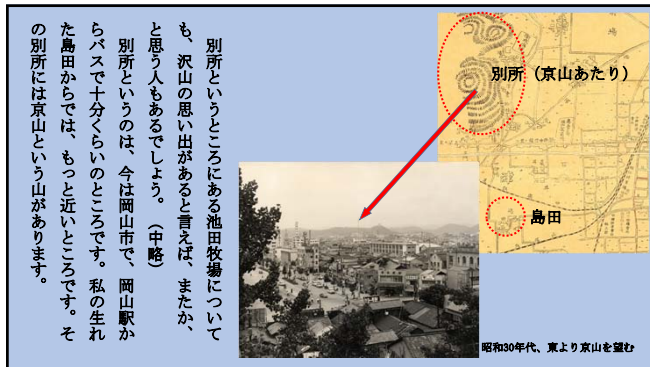


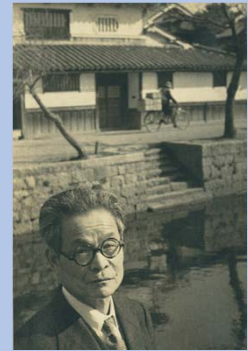
十三の時だったでしょうか。学校の本以外の本を読み出した頃です。どこから借りて来たのか、ロビンソン・クルーソーの本を友達と二人で手にしたわけがあります。面白くて、面白くて、二人は十分か、二十分で、交代しいい読みました。そんなに面白い本が、世の中にあることを、それまで知らなかったわけがあります。



いや、本というものが、こんなに面白いということを知らなかったとも言えましょう。(中略) とにかく、少年の頃、私が読みたくて、読みたくてならなかった本を、今頃、自分の出た小学校に送って、今の子供たちに読んでもらおう。そういう心持ちであります。







お粗末な紀行文になりましたが、故郷を訪ねた作家の日記のようなものです。では、ごめん下さい。

※ 出典…「田園まさに荒れんとす 岡山風土記」別冊小説新潮（昭和三十年五月号）



目の下の海は実によくないだ平和の姿でしたが、一つの島の岩角に、一艘（そ）の発動機船らしいものが、横倒しになって引っかかりていました。私はそれを眺めながらしきりに、その船で遭難した船員のことを考へておりました。



小石の遺作・取材旅行「車窓の千丁の柳」（内田百閒）小説新潮 昭和32年9月号より

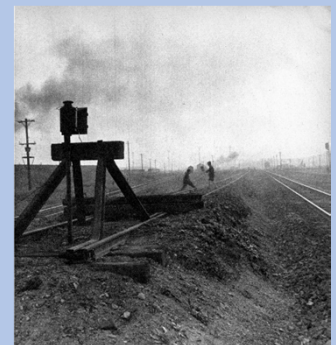
小石の最後は、奇しくも岡山出身の小説家内田百閒の「千丁の柳」に述べられているとおり、昭和32年6月の取材旅行で内田百閒と別れて16日に事故で亡くなっています。



1956（昭和31）年、小石清47歳（カメラ毎日1956年2月号より）

■編集者・追記

この取材旅行に同行したカメラマンは、戦前の日本写真界を代表する、アバンギャルドの旗手と言われた写真家・小石清です。戦中は報道写真を中心に活躍し、戦後は門司市（現・北九州市門司区）に写真店を開業。友人の編集者に頼まれ、昭和27年から小説新潮のグラビア写真シリーズを手がけていました。



岡山駅を西へ五百メートル。それがこの写真です。ここまで、生家の門から二百メートルくらいでしょうか。昔は山陽鉄道といい、田園の中をどろどろと進む車線だったのです。フミキリには、「汽車に用心すべし」という札が草の中に立っていました。私は用心しながら、線路を歩きました。村の人に合わないで、きらくに遊び歩きました。

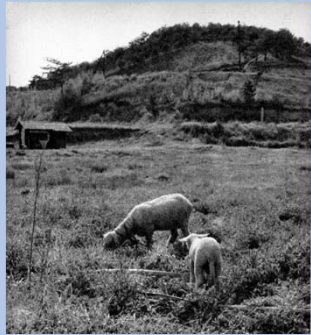
（中略）

おもいで町・岡山



※原作：「おもいで町」15 岡山」暮らしの手帖第（第45号昭和33年7月5日発行）
※写真撮影：松本政利

ここは私の作品「子供の四季」の牧場の跡です。岡山から旭川をのほること一キロ。三野公園の北側がこの写真です。今は自衛隊の弾薬庫の構内なのですが、変れば変る世の中です。明治四十二年春のことです。



当時私は十九才で、早大文科の予科に居りました。人生問題に思い悩み、学校をやめてここにあった兄の牧場で働くことになったのです。毎朝早く、十頭ばかりの牛を追うて、近くの旭川の河原へ放牧に行くのが、私の役目の一つでした。(中略)



慶治の早稲田大学時代 (明治末年頃 慶治20歳頃)

岡山は戦災で八九分通りやけました。そして新しく建ち代りました。私はよく岡山へ帰るのですが、町を通って、いつも考えて見るのです。(中略) と(中略)で(中略)は焼け残った方の町の一つです。石段の上の通りは出石通りと申します。これを真直に北へ行けば、「子供の四季」の牧場へ出るのです。(中略)



ここは岡山銀座です。上之町、中之町、下之町とつづく町なのです。但し戦災で焼けて今は新しく建ち代って居ります。然し岡山生れのもので、ここに思出のないものは一人だつてありません。



さて、私の第一の思出。それは本屋です。上之町、中之町、それから栄町に橋本町でしようか。一つずつ本屋があったのです。それを私は中学が終つてから一軒一軒廻つて歩いたのです。愛読の雑誌「少年世界」がもう来ている頃と思つたり、何か読める本はないかとあさり歩いたり。上之町から橋本町まで四軒歩けば、もう終りなのです。(中略)



実は、私の初めの中学はこの町に近く、洋服や靴をこの町で造つたのです。その時両方の代金八円を持って、私はその辺を歩き、これだけの金を持って、ここを歩いて居るものが何人あるだろうと、考えました。八円が今の八十万円にも考えられたのでしょうか。



